

| | |
|--------------|---|
| Title | 《講演録》国文学科の思い出 |
| Author(s) | 田中, 裕 |
| Citation | 語文. 2000, 74, p. 43-47 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68965 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

国文学科の思い出

田中 裕

ご紹介いただきました田中でございます。もう久しくこの総会に参ったことはありませんので、私の顔を初めてご覧になる方も多いことと存じますが、私は久しぶりに参りまして皆さんにお目にかかれたことを大変嬉しく思っております。長らくご無沙汰して参りますことには別に仔細があるわけではないのでありまして、ただ辞めた所にはなるべく近付くまいと心掛けている、それだけのことなのです。しかし、そういう私にこういう講演の機会を与えて下さって、まあ出て来いとおっしゃっていただいた研究室の諸先生のご芳情に心から感謝しております。

去年四月頃でしたが、五十周年の総会でもあり、何か思い出話でもしてはどうかというお話を承った時、私はよくも考えずに即座にお引受けしたのですが、その後ちょっと動揺することがありました。と申しますのは、このあいだ十一月に、文学部の五十周年の式典がありまして、私も参ってお話をうかがい、お土産にいろいろとパンフレットをいただきました。それらをずっと拜見しておりますと、只今進められている文学部の改組拡充が大変なことが分かります。かねてうかがってはおりましたけれども、改めて「人類の未来を切り開く」とか、「新しい変革を模索し」といった文言に接しまし

て、思い切った改革が企図され、進められつつあることが十分推察されるのです。これは阪大、あるいは文学部の抱えている諸事情に基づくことはもとよりでありましようが、またいま全国の大学を巻き込んでいる共通の風潮でもあるようです。今日お見えになっている卒業生の皆さんも、めいめいご自分の大学で苦心されていることでありましよう。

ところで、こうしてパンフレットを拜見しながら、ともすれば浮んでくる印象、それはこの大きな将来計画の中に昔の文学部は形もなく呑み込まれてゆくのではないか、というものでした。むろんたとえそうなつても、いずれは昔のことがゆつくり思い出され、顧みられる時のあることも疑ってはおりませんが、ともかくそういう印象を受けたことは事実です。そして、こういう時に昔の思い出話などするのはいささか場違いではなからうかと思ひ、困ったことをお引受けしたと思つたのでした。そのうちに、『二十一世紀にはばたく』という表題のパンフレットの最後を開きますと、そこに現在文学部で刊行されている研究誌の表紙写真が見開き一ぱいに並んでおりまして、その下に創刊の年が記されている。ちょうど二十種あります。が、中で一番古いのが『語文』でありまして、創刊は昭和二十五年、

二番目が一年置いて二十七年の『文学部紀要』です。これは教官の研究発表機関として出発したかと記憶しますが、三番目が二十八年のフランス文学会の『GALLIA』です。さき程伊井（春樹）先生もおっしゃったように、文学部が法文学部として発足したのは昭和二十三年ですから、もう二年目に『語文』は刊行されているわけです。しかもそれが現在まで七十輯を重ねているのです。なるほど今日までずっと形も変えずに続いているものに『語文』がある、そう思いまして、それなら一つそれを寿いで『語文』についてお話ししようと思いつきました。

尤も『語文』につきましては、昭和の最後の年、ちょうど五十輯に当りましたが、編集・発行が国文学会に変わるのを機会に、何か創刊当時の思い出をと信多先生に申しつけられまして、一文を寄せたことがあります。そこでは、それまで編集は国文学研究室、発行は文進堂という本屋でしたが、どういいうきさつでそうなったのかということ、また当初小島（吉雄）先生は『語文』をどういう研究誌に育てようと考えていられたのか、といったことを主に書いたかと記憶いたします。ですから今日は別に、『語文』という名前の由来、それからもし時間が余れば『語文』と小島先生、といったお話にしようかと思っております。今日は立派な研究発表がたくさんありましたから、私の話のごく気楽に聞いていただきたく、凡そ四十分位で失礼いたしたく存じます。

ご承知のように、『語文』というのは阪大の『語文』と、それから日本大学国文学会に全く同じ名前の機関誌があります。創刊年月もほとんど同じでありまして、阪大の方は昭和二十五年十一月、日大のは翌二十六年一月です。因みに申しますと九州大学国語国文学会

の機関誌も『語文研究』と申し、これは同じ二十六年の三月の創刊です。『国語年鑑』を見ますと、『語文』という名が付いているのはこの三つですが、それらが僅か五ヶ月の間に次々と出ているのです。その頃私はこのことについて小島先生に、これはどういうことでしょうかとお尋ねしたことがありましたが、先生は至極あっさり、「それは元は一つなんだ。昔九大の研究室で、もし雑誌を出すなら『語文』はいい名前だな、という話があった。そのことを高木市之助先生も忘れずに、それを日大に持ってゆかれ、私も阪大に持ってきた。お互い全く無関係なんだが、元は一つだ。」そういうことをおっしゃった。それで私は釈然としたのですが、一度このよい話をどこかに書いておきたいと思っていたものですから、今度この話をすることに決めるについて、渡邊（志津子）助教授と助手の米谷（隆史）さんをお願いして、あれこれと関係誌について調べていただきました。そうしますと小島先生のおっしゃった通りなのです。おっしゃった通りなのですが、それをもう少し、先生のお言葉の注釈としてお話ししたいと思うのです。

高木市之助先生と小島先生とが九大の研究室で教授、助教授の間柄でいらしたことは申すまでもないでしょう。ところがこれをうち壊したのが終戦で、昭和二十年九月、降伏の調印がすむと矢継ぎ早に進駐軍によって重要な諸指令が発せられました。政界や官界のこととはよく知られていますが、教育界もその例に漏れず、まず十月に日本の教育制度の運営に関する覚書が出、つづいて教職員の資格審査に関する覚書が出ました。この指令に基づいていわゆる教職追放令が発せられるのはそれから半年ほど経ってからです。当時旧制の甲南高校にいた私どもは近畿南部地区学校集団教職員適格審査

委員会という長々しい名前のところで審査がありました。大学はそれぞれ自主的に学内に審査委員会が設置されました。ところが審査結果をまずに辞表を出された人も少なくかつたようです。資格審査の先手を打って辞められたについてはいろいろの理由があつたでしょう。敗戦という未曾有の混乱の中で諸行無常を覚えた方もあつたでしょうし、戦時中の行蔵を顧みて自責の念に駆られた方もありましょうし、パージにかかるといふならこちらから辞めてやろうと思つた方もありましょうし、その外にもなお事情は想像されますが、高木先生はさつきとお辞めになりました。小島先生にはご自編の年譜があり、それは『能古』という歌文集の奥に付いておられますが、それによりますと、あの指令の出た二十年の年末、感ずるところがあつて大学に辞表を出したが、大学の事情から翌春却下されたことが記されています。また書中の文章の中には「帰去来の辞で却下されたといふのは既に高木教授が辞意を表明されていたからではないでしょうか。お二人に一時に辞められては国文学講座は成り立ちませんか。こうして止むなく辞表を撤回され、やがてその年の九月に教授に昇任されることとなります。

高木市之助先生は九大をお辞めになると日田にあるさる学園に移られたようですが、昭和二十三年の四月に日大法文学部教授、国文学科主任に就任されます。そして二十六年一月に国文学会の機関誌として『語文』を発刊されたわけです。因みにそれまでの機関誌は『国文学』と申し、十二輯を数えておりました。それが『語文』と改称されて再出発するについては創刊号の巻頭に高木先生の発刊の辞を載せ、編集後記を見ますと誌名は会長高木先生の命名によることとは

つきりと記されています。阪大の方もやはり創刊号の編輯後記に、これは林（和比古）先生の執筆にかかりますが、小島先生が命名され、題字も嵯峨本徒然草から集字されたことが見えます。ごたごたと申しましたが、結局九大の研究室の中で生まれた一誌名が海を渡つて、一つは高木先生の手で日大にもたらされ、一つは小島先生の手で阪大にもたらされたのでした。『語文研究』はといえば、おそらく九大の研究室でも昔交わされたこの話がよく記憶されていたのではないのでしょうか。実は私は『語文研究』があるいは中で一番古いのではないかと思つておりましたが、そうでないことを今度知つたのでした。尤も九大の機関誌は、小島先生のさき程の著書によりますと、早くからさまざまに名を替え、形を替えながら継承されているではありませんが。

さて残つた時間で、小島先生のその後のこと、阪大に來任された当初のご動静についてお話いたします。先生はあのようないきさつで九大に残られましたが、阪大に法文学部が開設され、一ヶ月後に国文学講座の授業が開始されますと、同日付けで講師を委嘱されています。従つて翌年四月に教授の発令があるまではなお九大を本務とされていたわけです。しかし先生が法文学部にかかわりをもたれたのは実はさらに遡るのです。

ちよつと脱線いたしますが、私が退職する少し前に、『大阪大学五十年史』が編纂されました。その中心は各部署の紹介で、諸講座の沿革とか所属教官の任用の次第や担当の研究分野などが詳しく記載されておりますが、そのはじめに部局全体の沿革、いわばその部局の通史が付いておりまして、その文学部のところを命ぜられて執筆いたしました。執筆するについて私は、開設以来の教授会の議事録

をすべて読むことになりました。今となつては議事録全部を通読したのはおそらく私ぐらいのものであらうと、いささか誇りかにも思つておりますが、それはともかくとしまして、その折初めて知ったことは、小島先生が、講師になられる以前に、いち早く教授内定者として学部運営に携わつていらしたことです。

法文学部開設当時の、後年の文学部に相当する講座と申せば僅かに七つで、哲学関係四、あとは国史学、国文学、英文学講座でした。そして授業開始までに次々と教授内定者が決まりましたが、最初に決まったのが心理学第一講座の桑田（芳蔵）先生と小島先生でした。教授内定者の仕事はしかし、授業開始をまつまでもなく既に始まつておりました。この様子をよく教えるのがこのお二方の場合です。

年表でも作つて参ればよかつたのですが、昭和二十三年六月に法文学部開設の件が国会を通過しますと、直ちに開設のための準備委員会が他の部局の教授も交えて設置されましたが、八月その第一回の打合わせ会が総長室で開かれます。中心になつて議事を進めたのはおそらく、やがて法文学部長になられる桑田先生で、この方は東大名誉教授でしたが、同時に委員でいらしたのが小島先生です。ここで真つ先に採り上げられたのが入学志願者募集要項だつたようです。次に加わられたのが国史学講座の藤（直幹）先生、それから次々に内定者の方々が参加されています。その間に法文学部規程や授業学科目も出来、また入学試験問題も作られ、採点もされなどして十月には第一回の入学宣誓式を迎え、授業開始の運びとなりました。そして年末までに内定者の方々の正式の発令を見たのでした。

ところで小島先生ですが、さきに申しましたように、二十年の年末に陶淵明の『帰去来の辞』を地でゆくおつもりで早々と郷里大阪

へ帰ろうとなさりながら、已んぬる哉、叶いませんでした。それが三年半後にこうして実現しようとは想像もされなかつたことでしよう。それだけにご帰阪後、来学後の意気込みは大変なもので、まず八木（毅）助手を片腕として銳意力を注がれたのが図書蒐集で、今日も調査報告のあつた忍頂寺文庫の收得など、その早いもの一つではなかつたでしょうか。国文学会を発足させられたのもまだ講師でいらした間で、教授に直られた二十四年のその十二月には、法文学部の一番教室で第一回の国文学公開講演会を開かれました。演題を見ますと、もう皆お亡くなりになつてしまわれましたが、犬養（孝）先生が「万葉の音感美」、宇佐美（喜三八）先生が「大隈言道の歌論」、林（和比呂）先生が「激情―枕草子の翁丸」、小島先生は近松の諸作品を扱つて「我国近世の運命悲劇について」で、この題目はなかなかお気に入りのものでした。

さて翌二十五年十一月に『語文』発刊の運びになつたわけですが、刷り上りますと早速、二三日して創刊記念の公開講演会を大阪大学国文学会主催で開催されました。場所は桜橋にある毎日新聞大阪本社講堂でしたが、半年前私も教官の末席に加えていただいたばかりのことで、まことに不束にも、なぜこんなことをするのですかとお尋ねしたらしいのです。その時、言下に、「大阪に文学部ができたということは市民は知らん。ことに国文学科のできたことは誰も知らん。大いに宣伝せねばいかなのだ」とおっしゃつたお言葉は忘れることができません。講演会が大盛況であつたことは当時の『語文』の巻末に出しており、四百人近い聴衆が堂にあふれたとあります。諸先生の講演は犬養先生が「藤村の『夜明け前』について」でしたが、藤村は万葉集と並ぶ先生の十八番で、宇佐美先生は「言道と淡窓」、

そして小島先生は「芭蕉の自然随順について」です。宇佐美先生のお話は東大の『国語と国文学』に、小島先生のそれは『語文』に、どちらもその翌年ぐらゐに発表されています。⁽⁶⁾ どうやらけりもつきましたようで、これでお仕舞といたします。ありがとうございますました。

注

- (1) 田中裕「語文五十輯を迎へるに寄せて―創刊のころ―」(『語文』第五十輯、昭和六十三年三月)。
- (2) 小島吉雄「能古」(初音書房、昭和四十七年十一月)。
- (3) 『高木市之助全集』第十卷(講談社、昭和五十二年三月)の年譜によると昭和二十一年三月九日を辞し、四月 大分県日田市に太平洋学園を開校、太平洋文化研究所長となる」とある。
- (4) 福田安典「忍頂寺文庫調査報告―その諸問題―」(平成十一年度大阪大学国語国文学会における調査研究報告)。
- (5) 『語文』第二輯(昭和二十六年三月)の兼報「大阪国文学界現況」項。
- (6) 宇佐美喜三八「大隈言道の歌論について」(『国語と国文学』第二十八巻第十一号、昭和二十六年十一月)、小島吉雄「芭蕉の自然随順について」(『語文』第五輯、昭和二十七年四月)。

〔追記〕

平成十一年度大阪大学国語国文学会(平成十一年一月十五日(金)、於・大阪大学吹田学舎コンベンションセンター一階会議室)における講演に基づいて手を入れました。「注」は、助手の内田宗一さんのご配慮によるものです。また高木市之助先生のことによれて日本大学の有吉保氏や八木毅氏には直接ご指教をいただきました。厚く御礼申し上げます。(田中)

——本学名誉教授——